HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	educationの初出 : ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳
Author(s)	白水, 浩信; 寺崎, 弘昭
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 136, 93-119
Issue Date	2020-06-25
DOI	10.14943/b.edu.136.93
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78790
Type	bulletin (article)
File Information	07-1882-1669-136.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

educationの初出

― ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳 ―

白　水　浩　信*・寺　崎　弘　昭**

【キーワード】教育（education），語彙の系譜学，揺籃期，ヴァンサン・ド・ボーヴェ，ジャン・ドーダン，偽セネカ

はじめに―educationという語

教育学ないし教育科学が，educationという語の歴史についての共通認識を前提として有さないとすれば，人はそれを滑稽だと思うだろう。現代に流通している「教育」という熟語は基本的にeducationの訳語として普及したものだという事実からだけではなく[1]，教育関連学会自体がそれぞれ英語名称を併記して公然とeducationを研究対象としていることを自ら表明しているからでもある[2]。そのeducationという語の系譜・由来についての共通認識を欠如させたままそれぞれが恣意的に捏ね上げたイメージを前提にeducation言説がやりとりされる様は，悲劇を通り越して喜劇さらには笑劇の域にある。

せめてeducationの学的・科学的言説だけは，educationという語の系譜（Genealogie）・由来（Herkunft）[3]を自覚して，その土台の上に構築されたものでありたい。educationは歴史的な概念であって，歴史の表層で無自覚に時流に棹差し捏ね上げて済ませられるものではあるまい。土台のない構築物は砂上楼閣，その言説は歴史の表層を上塗りしながら上滑りし，自己増殖した挙句に崩落しながら滑り落ちるだけである。

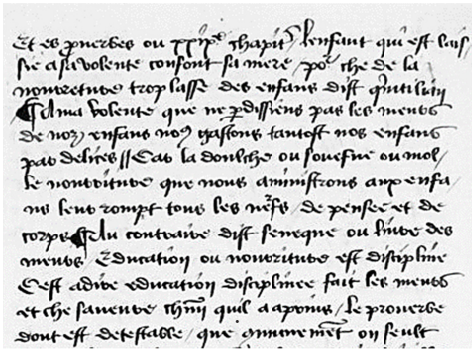
教育史はHistory of Educationと称するからには，まずはeducationのhistoryでなければならないはずである[4]。その前提は，贅言を弄するまでもなくeducationという語の歴史。そのさいまず，educationの初出をどこにもとめるのかが課題となる。

1．ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』――ジャン・ドーダンによるフランス語訳

われわれは新たに，1401-1500年のものとされる写本の中にeducationを見出す。

その写本とは，ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』のフランス語訳（1401-1500年，以下，BnF français 9683）[5]であり，フォリオ71vに“Education”・“education”とあるのが

* 北海道大学大学院教育学研究院・教授　** 元 山梨大学教職大学院・教授
DOI：10.14943/b.edu.136.93



［**Fig. 1**］ *Vincent de Beauvais, De la condition ou enseignement des enfans nobles*, traduction française par Jean Daudin, BnF français 9683, 1401-1500, fol. 71v（部分）

それだ。

> Seneque ou liure des meurs **Education ou nourriture** est discipline［.］Cest a dire **education** disciplinee fait ses meurs（セネカの道徳格言集にこうある。教育もしくは養育は規律である。すなわち規律的教育は品性（習俗・習慣・道徳性）を制作する，ということだ。）[6]

言うまでもなくBnF français 9683は，13世紀ヴァンサン・ド・ボーヴェ（Vincent de Beauvais, d.1264）が1247年頃に著わした『貴族の子らの教養（*De eruditione filiorum nobilium*）』をフランス語訳したものであり，訳者は14世紀のジャン・ドーダン（Jean Daudin, d.1382）とされている。この写本は，シュタインが述べているように，『貴族の子らの教養』フランス語訳として唯一現存する15世紀写本である[7]。

ヴァンサンの原典では，当該の一文はこうなっている。

> vero Seneca in libro de moribus Educatio inquit et disciplina id est educatio disciplinata mores facit（セネカは道徳格言集でこう言っている。教育と規律，つまり規律的教育は品性（習俗・習慣・道徳性）を制作する，と。）[8]

これは，偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』にある，

> 教育と規律は品性（習俗・習慣・道徳性）を制作する。（Educatio et disciplina mores facit.）[9]

を引用したものだ。

もちろん件の“Education”・“education”は，ラテン語educatioをフランス語に借入したもの。しかし，原典にあるeducatioがすべてフランス語educationに移し訳されていたわけではない。この偽セネカ『道徳格言集』の引用部分の他には，あと１箇所，第40章でeducationemを“education ou nourrisement”[10]と訳しているだけなのである。

実際，ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』中にはラテン語educatio・educare用例が11件ある[11]。そのうちeducationの訳語が充てられていたのは３件のみである。他には養うを意味するnourriture・nourrirがほぼ充てられており，educationを充てる場合にも「もしくは（ou）nourriture（あるいはnourrisement）」と付け加えてeducationという新奇な借入語の説明をせねばならなかった。そして，educatio・educare全11用例のうち７件は，第23章「子供の道徳教育（De morali puerorum instructione）」に集中しているのであるから，その第23章で偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』の訳語として新奇なフランス語educationが出現したことは特記されるべきことなのである。

2．ジャン・ド・ヴィニェ訳『歴史の鏡（*Miroir historial*）』

フランス語éducationの初出についてのこれまでの常識は，結論だけ言えば，13世紀ヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鑑（*Speculum historiale*）』[12] のジャン・ド・ヴィニェ（Jean de Vignay）によるフランス語訳，それも1495年印刷出版本[13] の中にフランス語educationが出現した，ということに尽きる。

たとえば，『フランス語宝典（*Trésor de la Langue Française*）』[14] が，

> Pédagogie 1495 Jean de Vignay, *Mir. Hist*. IX. 15 édit. 1531 ds delb. *Notes mss*.[15]
> Éducation 1495 J. de Vignay d'apr. BL., -W.[1-5]

と記述し，ブロック／ヴァルトブルク『フランス語語源辞典（*Dictionnaire Étymologique de la Langue Française*）』[16] が簡潔に，

> éducation 1495

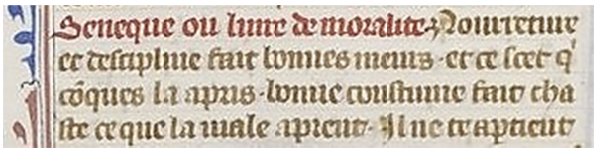
と記しているのは，そのことを意味している。

ガストン・ミヤラレ『教育科学（*Les sciences de l'éducation*）』はéducationの初出に関して，「1327年には，ジャン・ドゥ・ヴィニェの『歴史の鏡』（De Vignay, J., *Miroir historial*）にすでにこの語があらわれている」[17] と言っているが，これはドーザ『フランス語語源辞典』（1938年）[18] が，

> éducation（1327, Mir. hist.）

と不用意に記述していたのを真に受けたものにすぎない。ジャン・ド・ヴィニェは14世紀前期の人だから[19] 当時の写本にまで遡ることができるはずだ，という想定に基づいたものだろう。

しかし，実際にフランス国立図書館等所蔵の写本にあたってみれば，当該箇所は“Education”ではなかったことは明白で，“Nourriture”（あるいは“Nourreture”）となっていた[20]。1495年印刷本の時点で訳語が掏り替えられていたのだ。だから，ド・ヴィニェ訳『歴史の鏡（*Miroir historial*）』に関しては，1495年以前の写本の中に“education”が見出される例を具体的典拠と共に示されることがない限りは，1495年がフランス語educationの初出年であるしかないのである。


Seneque ou liure de moralite. Nourreture
ce disipline faut lomes mens et ce sert q
cõques la apres lomme coustume fait cha
ste ce que la male apreut. Ne ne apreut

［**Fig. 2**］ Vincent de Beauvais, *Speculum historiale, traduction française par Jean de Vignay, sous le titre Miroir historial*, vol. II. (Livres VII-XI), 1370-1380, NAF 15940, fol. 121r

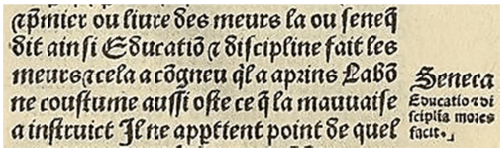
それゆえに，われわれが新たに，ヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鑑（*Speculum historiale*）』ではなく，同じ著者でも『貴族の子らの教養（*De eruditione filiorum nobilium*）』のフランス語訳写本（BnF français 9683）の中に別途フランス語educationが見出されるのを主張することは，フランス語educationの初出を1495年よりも以前の時期に遡って想定することを可能にするものである。その唯一現存するフランス語訳写本は「1401-1500」年の制作とされているものだからである。もとより「1401-1500」というのは，1495年以降も含んではいる。しかし，1401年以降1495年以前の可能性も大いに含んでいる。しかもこの場合，翻訳者ジャン・ドーダン

の活動期である14世紀にまで遡って想定する可能性も閉ざされてはいない。

そしてこのさい着目されておかれるべきことは，ヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鑑（*Speculum historiale*）』のジャン・ド・ヴィニェ訳1495年印刷本（Jean de Vignay, *Le Second volume de Vincent, Miroir historial. Nouvellement imprimé à Paris*, Paris, 1495）の中に，フランス語educationは次のように登場していた，ということである。

Educatiõ et discipline fait les meurs[21]

欄外註に“Seneca Educatio et disciplina mores facit.”とあるから，これは，偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』の一文のフランス語訳だったということだ。



［**Fig. 3**］ Jean de Vignay, *Le Second volume de Vincent, Miroir historial, Nouvellement imprimé à Paris*, Paris, 1495, fol. 41r

3．偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』

ジャン・ド・ヴィニェ訳『歴史の鑑』1495年印刷本と同様に，ジャン・ドーダン訳『貴族の子らの教養』において初出するフランス語educationは，偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』の中から出現したものであった。この共通性を重く受け止めねばならない。

偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』の原文は，こうだ。

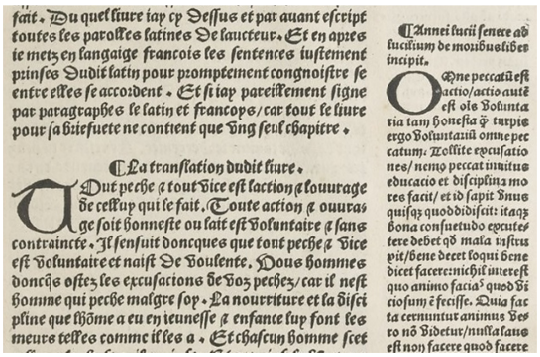
> educatioとdisciplinaがmoresを制作する（Educatio & disciplina mores faciunt, & id vivit unusquisque, quod didicit. Itaque bona consuetudo excutere debet, quod mala instruxit.）[22]

ここには，“mores”（moral）成型に関わって，“educatio”や“disciplina”はもとより，「善き習慣（consuetudo）」や“instructio”まで，簡潔に集約されて纏められており，educatioをdisciplinaに捕り込む恰好の格言を偽セネカ『道徳格言集』が提供するものになっていたことを示している。

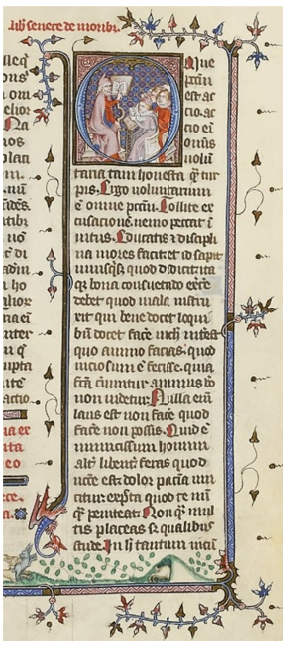
『道徳格言集（*De moribus*）』はじつは6世紀頃のものにすぎないが，中世・近世を通じて1世紀セネカの作品だとみなされてきたものである。たとえば，13世紀末の『セネカ哲学全集（*Senecae varia opera philosophica*）』には，『道徳格言集（*De moribus*）』に“Educatio et disciplina mores facit”[23]（fol.9r）が見える。

［**Fig. 4**］ *Senecae varia opera philosophica*, 1275–1301, BnF latin 6390, fol.9r

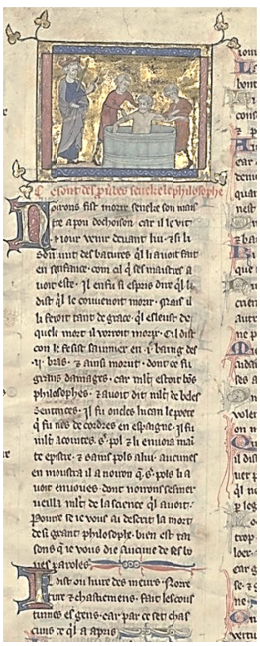
しかしながら，15世紀以前のド・ヴィニェ訳『歴史の鑑』写本がそうであったように，その“Educatio”のフランス語訳が一律にeducationとされていたわけではない。15世紀に入ってもローラン・ド・プルミエフェ（Laurent de Premierfait, d.1418）によるフランス語訳においては，“educatio et disciplina”は“La nourriture et la discipline”と訳されていた[24]。遡れば，13世紀末の写本に『哲学者セネカの箴言（*Ce sont des prouerbes seneke le philosophe*）』と題されたものもあり，そこでは“Norreture et chastiemens”と訳されていたのである[25]。ラテン語educatioはまずはnourritureとフランス語訳されるものであった。



［**Fig. 5**］ *Les Euvres de Sénèque, translatez de latin en françoys par maistre Laurens de Premierfait*, Paris, 1500–1503, 50r



［**Fig. 6**］ *Ouvrages et extraits des ouvrages de Sénèque*, Bibliothèque de l’Arsenal Ms-1085, 1301–1400, 284



［**Fig. 7**］ *Recueil d’anciennes poésies françaises*, 1275–1300, Bibliothèque de l’Arsenal, Ms-3142, 320r

そもそも15世紀より以前，14世紀のフランス語写本の中にeducationを見出すことは困難である。周知の有名どころで言えば，ジャン・ドーダンの同時代人ニコル・オレーム（Nicole Oresme，1322?-1382）によるアリストテレス『ニコマコス倫理学』・『政治学』フランス語訳の中には“education”は見出されない[26]。『ニコマコス倫理学』第10巻1179b-1180aを例にとれば，13世紀グロッセテステ（Robert Grosseteste，1175?-1253）がギリシア語τροφή（トロフェー）をラテン語nutricioneと訳した[27]――後にレオナルド・ブルーニ（Leonardo Aretino Bruni，ca.1370-1444）はこれを“educatio”とラテン語訳するのだが[28]――のを承けて，オレームは“nourrissement”とフランス語訳していたのである[29]。プラトン『パイドン』の例でも，「魂がハデスに赴く時に伴い得るものは，学びと養いのしるしだけ」[30]（107D）の「学び（παιδεία パイデイア）と養い（τροφήトロフェー）」の訳語は，12世紀アリスティッポス（Henricus Aristippus，d.1162）ラテン語訳では“doctrinam et educacionem”[31]，15世紀のブルーニ訳で“eruditionem atque alimoniam”[32]，マルシリオ・フィチーノ（Marsilio Ficino，1433-1499）訳で“eruditionem atque educationem”[33]となるが，16世紀に入ってもフランス語訳では“la science & norriture”と，營養を意味するτροφή＝educatioは“norriture”とフランス語訳され続けたのだ[34]。

だから，『貴族の子らの教養』ジャン・ドーダン訳（BnF français 9683）においてラテン語educatioが“education”とフランス語訳された，そのこと自体が新奇で稀少な例だったとしても，驚くことではない。じっさい，既に述べておいたように，ラテン語educatioがフランス語educationに移し訳されていたのは，第23章における偽セネカ『道徳格言集』の引用部分2箇所の他には，あと1箇所，第40章でeducationemを“education ou nourrisement”と訳しているだけなのである。原典中にあるラテン語educatio・educare用例11件のうち3件のみ。他はほぼnourriture・nourrirが充てられており，educationを充てる場合にも「もしくは養育（ou nourriture あるいはou nourrisement）」と付け加えてeducationという新奇な借入語の説明をせねばならなかったのであった。

原典中にラテン語educatioが登場するのは第23章からであるが，その最初は，新約聖書パウロ『エフェソ人への書簡』（vi.4）の引用「薫陶と訓戒によって子らを育てよ（Educate illos in disciplina et correptione, ἐκτρέφετε αὐτὰ ἐν παιδείᾳ καὶ νουθεσίᾳ）」（Eph.vi.4）。これは新約聖書中に僅か3箇所しかない“παιδεία”用例（Ephes. vi.4; Hebr. xii.5-11; 2 Timot. iii.16）の一つである。だが，そのフランス語訳は“nourriture des enfans en discipline et correption”[35]となっていて，“Educate”― τροφήの動詞τρέφωのラテン語訳 ―は“nourriture”と訳されている（他方，παιδεία＝disciplina＝discipline）。また原典では偽セネカ『道徳格言集』の引用部分の直前にあのクウィンティリアヌス（Marcus Fabius Quintilianus，ca.35-100）『弁論家提要（*De oratoria institutione*）』に言及しているのだが，そこに見られる“educatione”も“educatio”も，フランス語訳では共に“nourriture”[36]なのだ。このことからも，フランス語educationの初出にあたり，偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』の特別な重要性が理解されようというものである。

なお，ジャン・ドーダンには，ペトラルカ（Francesco Petrarca，1304-1374）『順逆両境への療法（*De remediis utriusque fortunae*）』[37]のフランス語訳もある[38]。これにも，フランス語educationは見出せない。ペトラルカのラテン語原典中には，たしかに，educareがすくなくとも4箇所にあるのだが（第1巻第18章・第2巻第5章・第2巻第38章・第2巻第63章），しかし，

そのフランス語訳はそれぞれ“nourry”(“nourris”)・“nourry”・“nourris”・“nourris”となっていて，educationは訳語としては充てられていなかった。ちなみに，これには挿画入りドイツ語訳も16世紀にある[39]。

4．英語educationの初出

さて，educationという語の初出を論じる上で，以上のように，特にフランス語educationの初出が何故にクローズ・アップされることになるのか。educationと聞けば英語educationをまずは思い浮かべるむきも多いだろうことも考え，この際，英語educationの初出について簡単に補足しておくべきだろう[40]。

『オックスフォード英語辞典（*Oxford English Dictionary*）』を覗けば[41]，「education」項目内に採られた用例として最古のものはトマス・エリオット（Thomas Elyot, 1496?-1546）『ガヴァナー（*The Boke named The Gouernour*）』（1531年）だから，まずは誰でもここにeducation最初の用例があるとわかる。たしかに，その本文中に6件のeducationを見出せ，「教育の最良の形式（the beste fourme of education or bryngyng vp of noble chyldren）」[42]を論じる第1巻はeducationの初出にふさわしいかもしれない。しかし，『オックスフォード英語辞典』全体を見渡せば，“nouriture”（養育）の項目に1527年のeducation用例が入ってもいるので，そちらの方が初出ということになる。

それは，リチャード・クローク（Richard Croke, ca.1489-1558）の1527年書簡内の一節，「養育と善き学における若きジェントルマンの善き教育（good education, as well in noryture as good lernyng, of suche yonge gentilmen）」[43]。クロークもエリオット同様，トマス・モアやエラスムスと交友のある謂わば人文主義者サークルに属すので，基本的にこのサークル内から英語educationは出現したと言ってよい。

肝要なことは，このeducationも新奇で稀少な借用語だったということである。英語educationの初出を『オックスフォード英語辞典』の枠を外して考証すれば，1525年，リチャード・ウィットフォード（Richard Whitford, d.1555?）によって英語訳された『アウグスティヌス修道規則（*The Rule of Saynt Augustyne*）』[44]中の“educacyon”に求められるだろうが[45]，そのウィットフォード『家政のしごと（*A Werke for Housholders*）』（1530年）で“educacyon & doctryne / yt is to saye / bryngynge vp & lernynge”[46]と，“educacyon”を“bryngynge vp”と言い換えねばならなかったこと，また同じくウィットフォード『完全なる生活（*The Pype, or Tonne, of the Lyfe of Perfection*）』（1532年）に“the beste and moste perfecte educacion or bryngynge up of youthe unto vertue and good maners”[47]という用例は，当時において未だeducationが英語の中で安定した地盤を得てはいなかったことの証左なのである。エリオットが“education or bryngyng vp”と，“education”だけでは心許なく“bryngyng vp”と説明を付して用いざるを得なかったのも，また同様だったのだ。

擬プルタルコス『子供の教導について（περὶ παίδων ἀγωγῆς）』のエリオットによる英訳『子供の教育（*The Education or bringinge vp of children, translated oute of Plutarche*）』（1532年頃）[48]もそのことを語っている。その中には，書名・献辞・章題・本文を含め，全部で

4語の“educacion”と4語の“education”が見出される。書名と同様，そのうち2語は，翻訳本文冒頭で“education or bryngynge vp of the chyldren”（1A），そして“Educacion and bryngynge vp”（3C）と，“education”に“bryngynge vp”と説明を付していた。後者は，ギリシア語「養う（τρέφωトレフォー）」にヴェローナのグアリーノ（Guarino da Verona, 1374–1460）によるラテン語訳[49]が正統的にラテン語educationeを充てたもの，前者はギリシア語「導き（ἀγωγήアゴーゲー）」に敢えてeducationeを充ててラテン語educatioの「ピボット的旋回」[50]の端緒となったもの，それぞれにエリオットが英訳語を充てたものである。どちらも“education”は“bryngynge vp”と説明されている。これが1603年ホーランド（Philemon Holland, 1552–1637）の英語訳「子供の教育（*The Education of Children*）」になれば[51]，それぞれ“feeding and nourishing”，“education”と英語訳され，educationは元来の「營養（τροφήトロフェー）」の訳語から切り離され「導き（ἀγωγήアゴーゲー）」の訳語へと軸足を移した。そのうえさらにホーランドは「教養（παιδείαパイデイア）」にも“education”の訳語を充てるのである。グアリーノは『子供の教導について』訳においてπαιδείαを一語たりともeducatioとラテン語訳していなかった，にもかかわらずである。ここにおいて，英語educationは，「導き（ἀγωγήアゴーゲー）」を軸足として「導き（ἀγωγήアゴーゲー）」さらに「教養（παιδείαパイデイア）」の訳語へと「ピボット的旋回」を完結させ，「營養（τροφήトロフェー）」から解き放たれることとなる[52]。しかしこのさしあたりの完結は，17世紀の出来事である。16世紀は未だeducationの「揺籃期」[53]なのだ。肝要なことは，education揺籃期における語彙基板（vocabulary motherboard）の地滑りとそれによって生じた断層，その構造を解明しそこでの可能性にたち戻ることである。

トマス・エリオット『辞典』（*The Dictionary of syr Thomas Eliot knyght*, Londini, 1538）なる羅英辞典では，educereとeducareを別項目で立て，“Educatio”＝“educare”を次のように示していた[54]。

> Educo, aui, are,
>
> to nouryshe or brynge vppe from chyldehoode.
>
> Educatio,
>
> nourishyng or bryngyng vppe of chyldren.

ここに示されていることは，明瞭だ。第一に，Educatioの英訳語の側に“education”はない。Educatioは英語ではあくまで“nourishyng”＝“bryngyng vppe”である。トマス・モア（Thomas More, 1478–1535）『ユートピア（*Vtopia*）』（1516年）ラテン語原典とそのラルフ・ロビンソン（Ralph Robynson, 1520–1577）による1551年英訳[55]でも同様のことが言える。仔羊・仔馬・仔牛は「飼育する（educare, brynge vp）」[56]ものであり，「幼児の教育（educatio sobolis）」の小見出しが付いた節では「養われ（educatur, nouryshed）た子は乳母（nutricem, nource）を自分の母親のように思ってくれる」[57]。ちなみにこの一文は，1550年フランス語訳でも，“Lenfant qui est *nourry* recognoist pour mere sa nourrice.”[58]となっている。ラテン語educatioをそのまま“education”と英訳している唯一の箇所も，“education, beinge brought vp”[59]と説明付きになっており，フランス語訳は“nutrition”なのである[60]。

そして第二に，そのEducatioの英訳語の動詞形“nouryshe or brynge vppe”はラテン語Educo＝educareの英訳語だということである[61]。引き出すこと・導くことを意味するeducereはEducatioとは無縁だ，ということだ。このてん，セント・アンドリュース大学古典学教授

ドナルドソン（James Donaldson, 1831–1915）は『教育サイクロペディア』(1877年）の「教育（Education)」項目で明快に断じていることである。「ローマ人が教育（educatio）を「曳キ出ス（drawing out)」と結び付けたなんてことは到底ありそうもないことだ」,「教育（education）という語はそんな「曳キ出ス［educere＝lead out]」などという語義をもつことは断じてない」[62], と。

5．education＝“Norschynge”

ともあれ，16世紀より以前，15世紀までに英語educationの姿を見出すのは容易なことではない，ということが理解されよう。だからこそ，educationの初出を15世紀に遡ろうとすれば，フランス語に遡らねばならないのである。

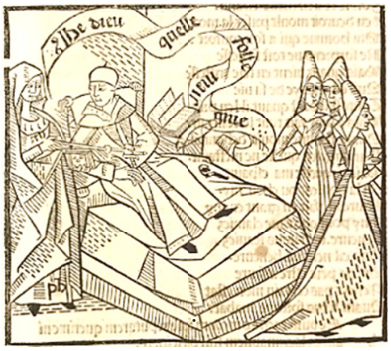
15世紀の英羅辞書においては，そもそもeducationを項目の中にさえ見出すこともできない。そこに見出されるのは，ラテン語《educare - educatio》が15世紀には“Norschynge”（nourishing）と対応させられていたということだ。

「最初の英羅辞典」と言われる『プロムプトリウム・パルウロルム（*Promptorium Parvulorum*)』(1440年頃）においては，

Norschynge in manerys and in condicionys: Educacio, -nis [63]

と，英語の“Norschynge”がラテン語“Educacio”なのである。また『カトリコン・アングリクム（*Catholicon Anglicum*)』(1483年）においてはもっと素朴に，ラテン語“educacio”―“educare”に対応する英語は“Nuryschynge”―“Nuryche”だった[64]。

中世英語にあるのはnorischenとfostrenとbryngen upである[65]。ウィリアム・カクストン印刷『アーサー王の死（*Le Morte Darthur*)』(1485年）には，educationはなく，16件もの“nourisshe”が用いられている[66]。あるいはまた14世紀チョーサー(Geoffrey Chaucer, d.1400）によるボエティウス『哲学の慰め（*De consolatione philosophiae*)』の英訳も同様で，「かつて私の乳で養い私の肉で育てた（nostro quondam lacte nutritus nostris educatus alimentis, I norschid with my mylke and fostred with my meetes)」(I.2)[67]ことを，「養い主（nutricem, norice)」の哲学はボエティウスに思い出させる。14世紀トレヴィサ(John Trevisa)によるバルトロメウス・アングリクス『事物の諸性質について(*De proprietatibus rerum*)』の英語訳では，bryngen upが雛鳥を養むことを意味していた[68]。これはラテン語educare，フランス語nourrirを承けたものだった[69]。1463年にはアシュビー（George Ashby)が，「私の子ども時代からの育ち(My bryngyng vp from chyldhod)」を回顧している[70]。



［**Fig. 8**］ *Cy commance Boèce, De la consolation de la philosophie*, trad. par Jean de Meung (124.?-1304?), 1482-1483

16世紀に入れば，しかし先述したように，ラテン語educatioを“education”と英語訳するようにもなる。『オックスフォード英語辞典』にeducation用例として採られているトマス・レイナルド（Thomas Raynalde）『人間の誕生（*The Byrth of Mankynde*）』（1545年）もそうした一例である。

これは，オイカリウス・レスリン（Eucharius Rößlin, 1470?-1526）が著わした産婆術書『妊婦と産婆の薔薇の園（*Der Swangern frawen vnd hebammen roszgarten*）』（1513年）を息子クリスチャン・エゲノルフ（Christian Egenolph, 1502-1555）がラテン語訳した『人間の誕生（*De partu hominis*）』（1532年）をレイナルドが英語訳したもの[71]。ラテン語版第11章で離乳に関して，アラビア医学者アヴィケンナは2年間の授乳を言っているが今日当地では1年で十分だと述べ，離乳期の營養を論じるところで“educatione”が登場する。「幼児の初期の營養はこれで十分だ。(prima educatione infantis sufficiant)」[72]，と。この“educatione”は原典『妊婦と産婆の薔薇の園』では“lere vnd vnderichtung von den Kinden”[73] なのだけれども，ラテン語版を英語訳したレイナルド『人間の誕生』は，そのくだりを第3巻第2章において次のように直訳した。

> 離乳する時には突然にではなく，少しずつ少しずつでなければならない。あらゆる肉を食べることができるようになるまでは，小片のパンと砂糖を与え馴らすことだ。この時期の幼児の教育（education and bryngynge vp）にはこれで十分である。[74]

この第3巻第2章はこう開始される章である。

> 子供に対する教育，養育，授乳に関しては（As concernyng the bryngynge vp, nourisshement, and geuynge of sucke to the chylde），母親自身が子どもに授乳するのが最善である。なぜなら，母親の乳が他の女性のものよりも幼児に便利で適合的であり，より營養する（nourisshe）からである。[75]

授乳および離乳期の營養を論じたのが第3巻第2章なのである。教育（education and bryngynge vp）は營養（nourisshement）だ。そのことを1536年フランス語訳ではもっと簡明に表わしていた。「幼児の初期の營養はこれで十分だ（ce suffire quant la premiere *nourriture* de lenfant.）」[76]。このようにラテン語educatioを“nourriture”と訳すのは，ジャン・コラン（Jean Collin）によるキケロ『法律について（*De legibus*）』のフランス語訳（1541年）でも同様だった[77]。

『オックスフォード英語辞典』の「教育者（educator）」の項目には，母親の乳房こそが「教

育者（educatour）」だと言明する用例も採用されている。ウィリアム・ペインター（William Painter, ca.1540–1594）『快楽の宮殿（*The Palace of Pleasure*）』（1566年）第23話中の一節がそれ。

> O thou vnkinde woman, dooest thou thinke that Nature hath giuen thee twoo breastes, for nothyng els but to beautifie and adorne thy body, and not to giue sucke to thy children? In like sorte many prodigious and monstruous women, haue dried vp and extinguished, *that moste sacred foūtaine of the bodie, the educatour of mākinde*, not without perill of their persones, as though the same were a disgracyng of their beautie and comelinesse.[78]

母乳育の神聖性を説いて，「肉体の最も聖なる泉たる女の胸，それこそが人類の教育者（educatour）である。」と宣言しているのである。人類の《教育》者は，女性の胸，つまり赤ん坊の生を養う乳。この『快楽の宮殿』第23話は，遡って，有名な２世紀アウルス・ゲリウス（Aulus Gellius, ca.125–ca.180）『アッティカの夜（*Noctes Atticae*）』第12巻第１章の英語訳である。「肉体の最も聖なる泉〔たる女の胸〕，それこそが人類の教育者である（fontem illum sanctissimum corporis, generis humani educatorem,）」[79]。

このように營養する者＝教育者を意味するラテン語educatorは，ゲリウスと同時代の諷刺作家ルキアノス（Lucianus）の『食客（παράσιτος）について』[80] の最初のラテン語訳，ヴェローナのグアリーノが1410年から1418年に完成させたとされる『食客について（*De parasitica vita*）』[81] でも見ることができる。そこでは，「食客を養う（τρέφειν τόν παράσιτον）」(59) は“parasitos educando”とラテン語訳されていた。食客を迎え食（τροφή）を共にすること，食客を養う（τρέφω）ことは，《教育（educatio）》なのだ[82]。前節58でも，度量大きく懐深く（liberales）食客を歓待し食（alimenta）を共にし養う（educant），そんな養い主（nutritor）なしには食客（parasitos）が存在し得ないことが語られている。educatorとは，「食客を養う（τρέφειν, educandum）人」(4)，「養い人（τρεφόντων, educatorem）」(48) なのである。“τρέφειν”こそが“educare”とラテン語訳される。そのことは，擬プルタルコス『子供の教導について』のグアリーノ訳でも，“τρέφειν”がnutrire, alereと共に，educare・educatioとラテン語訳されていたのと同様である。元来，《教育（educatio）》は《營養（τροφήトロフェー）》の系譜に属していた。

６．eruditioの掏り換え

しかしながら，ヴァンサン・ド・ボーヴェが1247年頃に著わした『貴族の子らの教養（*De eruditione filiorum nobilium*）』は書名どおりeruditione論にほかならず，educatioはそこに従属的に捕り込まれたものであった[83]。

ラテン語eruditioは，ブルーニやフィチーノによるプラトン『パイドン』ラテン語訳に見られたように，「教養（παιδείαパイデイア）」の訳語としてdisciplinaなどと共に充てられたものである。プラトン『メノン』の12世紀アリスティッポス訳ではπαιδεύειν全てに一律にerudireが充てられており[84]，アリストテレス『政治学』の13世紀モエルベカ（Guillermi de Moerbeke,

1215–1286）訳ではπαιδείαのラテン語訳にはdisciplinaの他にはeruditioしか用いられていなかった[85]。『貴族の子らの教養』はそのeruditone論だったのである。ジャン・ドーダンによるフランス語訳BnF français 9683の第1章（De puerorum nobilium eruditione）の章題も，“De la erudition ou enseignement des enfans nobles”（fol.3v）と訳されていた。『貴族の子らの教養』第1章冒頭から旧約聖書『シラ書（集会書）』（Ecclesiastics 7:25）「きみに子があるなら，これを教養せよ。幼いときからきびしく仕込め。（filii tibi sunt erudi（παίδευσον） illos et curva illos a pueritia illorum）」[86]を引用し至る所でシラ書に言及したのも，第23章で『箴言』（Proverbs 29:17）「子を教養せよ，そうすれば彼はあなたを安らかにし，またあなたの魂に喜びを与える。（Erudi（παίδευε） filium tuum et refrigerabit te et dabit delicias animae tuae.）」[87]を典拠として動員したのも当然である。

だから，『貴族の子らの教養』で『カトー二行格言詩集（*Catonis disticha*）』への言及が19回もあったとしても，不思議なことではない。この『カトー二行格言詩集』はあの古代ローマのカトーとは無縁の3～4世紀の産物だが，中世を通じてラテン語初級教材として汎用され続けたものであり，「子らを教養せよ（Liberos erudi.）」を含むものだった。この「子らを教養せよ（Liberos erudi.）」をエラスムスは“τὰ φίλτατα παίδευε.”[88]とギリシア語訳している。

エラスムスはこの格言に「子らを懲らしめ訓える（filios castiga & institute.）」[89]ということ以上の注釈は加えていない。が，興味深いのは，1477年フランス語訳では詳細な注釈が加えられていたということである。そこでは，子どもの時に「教えも規律もなく養育（norrist en sa ieunesse sans doctrines et disciplines）」されたために堕落した例が語られ，「セネカ（senecques）が言うように，子どもを教導し懲治せねば（enseigner et corriger les enfans）」ならないと勧告していた[90]。このフランス語訳の重訳が，ウィリアム・カクストン（William Caxton, ca.1422–1491）の発行になる1484年英語訳。そこでも，子どもの時に「教えも教授もなく養育（norysshe in his yongthe wythout doctryne and wythout techyng）」されたために堕落した例が語られ，「セネカ（seneque）が言うように，子どもを懲らしめ教授せねば（chastyse & teche the chyldren in theyr yongthe）」ならないと勧告する[91]。これが1550年英語訳になれば，「高潔な規律と知における教育（education and bringinge vp in honest Disciplines and knoweleges）」[92]の勧めとなる。

かくてeruditione論は，態よく，「教育（education and bringinge vp）」論へと掏り換えられた。ここでもち出された「セネカ」が偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』「educatioとdisciplinaがmoresを制作する（Educatio & disciplina mores faciunt,）」だということ，言を俟たない[93]。偽セネカ『道徳格言集』は，eruditio（そしてdisciplina）がeducatioへと掏り換えられeducationを僭称する謂わば錬金術的触媒・呪文だったのである。

おわりに――education揺籃期における語彙基板の地滑りの系譜学へ

educationの初出をヴァンサン・ド・ボーヴェの『貴族の子らの教養（*De eruditione filiorum nobilium*）』15世紀フランス語訳写本（BnF français 9683）―そして『歴史の鑑（*Speculum historiale*）』フランス語訳1495年印刷本―の中に見定めた。まずはなによりその

ことが，本稿の達成である。そこでのeducationの現出は，偽セネカ『道徳格言集（*De moribus*）』「educatioとdisciplinaがmoresを制作する。」という格言の翻訳（interpretatione）の中で生じたものだった。このeducatioをdisciplinaに捕り込む恰好のテクストの中で生じたラテン語educatioのフランス語educationへの変換によって，eruditione（eruditionあるいはenseignement）論は態よく「教育（education and bringinge vp）」論へと掏り換えられることとなった。

この事態は，15世紀（Quattrocento）を中心とする14〜16世紀のeducation揺籃期における語彙基板の地滑り――それによってdisciplina・eruditioがeducationを騙り横領し僭称するに至る――，その開始を告げ知らせる最初の幽かな狼煙である。

『カトー二行格言詩集（*Catonis disticha*）』「子らを教養せよ（Liberos erudi.）」をエラスムスが“τὰ φίλτατα παίδευε.”とギリシア語訳したことにも端的に見られるように[94]，eruditioにしてもdisciplinaにしても「パイデイア（παιδεία）」の系譜に属するもの。そのことは，古代思想史学者マルーが著わした『アウグスティヌスと古代教養の終焉』「補遺A教養の理念とラテン語語彙」（Note A: L'idée de culture et le vocabulaire latin）でも次のように言明されていたことである。

> disciplinaは……παιδείαの内容をかなりよく伝え，doctrina以上にπαιδείαの複合的な意味を示している。[95]

また述べる。

> ラテン語固有のeducatioには，ギリシア語のπαιδείαのもつ豊かな内包はなく，また決してもつこともなかった。Educatioは，ギリシア語のἀνατροφήにかなり近く，……［中略］……Educatioとは子どもを育てる（élever）ことで，それはまず子どもに食物を与える（nourrir）ことである。（傍点筆者）[96]

《トロフェー（τροφή）―educatio》の系譜は「パイデイア（παιδεία）」（＝disciplina・eruditio等）とは明確に系譜を異にするものだった。

したがってeducationという語の歴史を解明しようとすれば，education揺籃期における語彙基板の地滑りとそれによって生じた断層，その構造をまるごと解明しそこでの可能性を見極めるべくたち戻ること，一言で言えば〈教育の系譜学（Genealogy of Education）〉を企図せねばならない[97]。そのためには，

① トロフェー（τροφή）
② アゴーゲー（ἀγωγή）―パイダゴーギア（παιδαγωγία）
③ パイデイア（παιδεία）

これら三つのギリシア語とラテン語の系譜の区別を前提に自覚しつつ，象徴的には擬プルタルコス『子供の教導について（περὶ παίδων ἀγωγῆς）』の翻訳過程に見られるような「ピボット的旋回」――「導き（ἀγωγήアゴーゲー）」を軸足としてeducatio・educationを元来の系譜（「營養（τροφήトロフェー）」）から切り離し「教養（παιδείαパイデイア）」の訳語へと旋回し，そのことによって「パイデイア（παιδεία）」＝disciplina・eruditioがeducationを騙り，簒奪横領し，挙句に僭称するに至る――の全容を照らし出す課題を引き受けねばならないのである。それは，「瓦礫の山（Trümmerhaufen）」の中で，「歴史の毛並みをブラシで逆立て（die Geschichte gegen den Strich zu bürsten）」[98]根こそぎ掘り返す所業であるだろう。

［付記］　本研究の成果の一部は科研費（19K02494）の助成を受けたものである。

註

1 英語educationの邦訳語としての「教育」の初出は『改正増補英和對譯袖珍辞書』（慶應２年；1866年）にもとめられる（「educate-ed-ing 教育スル（ママ）」）。斯邁爾斯『西国立志編 原名自助論』中村敬太郎訳（明治３年；1870年），彌爾『自由之理』中村敬太郎訳（明治４年；1871年）でeducationの訳語として「教育」が充てられていたのは，明治初頭の例。なお，ロプシャイト『英華字典』（1866年）に「Educate, to bring up, 養育, 教養, 教育, �based」（Wilhelm Lobscheid, *英華字典 English and Chinese Dictionary: with the punti and mandarin pronunciation*, Part I., Hongkong, 1866, p.704）。蘭和辞典『波留麻和解（はるまわげ）』（寛政８年;1796年）に，オランダ語opvoedingの訳語として「教育スル」。ハルマ蘭仏辞典：“Opvoeding. Opbrenging. *Education*.”（François Halma, *Woodenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen, Dictionnaire Flamand et François*, Amsterdam, 1729, p.574）。蘭仏辞典：“Opvoeden, siet Voeden ende Voesteren.” “Voeden, Nourir, Entretenir, Alimenter, Sustenter, Conserver.”（Ian Louys D'Arsy, *Het Groote Woorden-Boeck, vervattende den Schat der Nederlandtsche Tale, met een Fransche uyt-legginge*, Ian Louys D'Arsy, Rotterdam, 1663）。蘭羅辞典：“Voeden / vueden. Alere, nutrire, fouere, educare. ang. feade.”（Cornelis Kiliaan, *Etymologicum Teutonicae Linguae: sive Dictionarium Teutonico – Latinum*, Antverpiae, 1599, p.631）。 羅 蘭 事 典：“Educatio est nutritio voedinghe” *(Vocabularius: Gemmula vocabulorum,* Dauentrie, 1489）。この連鎖を約めて言えば，《教育》はvoeden＝fovere（羽裏（ハクク）む）＝educare＝education。「education 養ヒ」「nourrir 養フ 哺乳スル」（村上英俊『佛語明要 巻之１－４』達理堂，元治元年;1864年）。また，藤原敬子「我が国における『教育』という語に関しての一考察」『哲学』第73集（三田哲学会），1981年，参照。

2 例えば，日本教育学会（Japanese Educational Research Association），教育史学会（The Japan Society for Historical Studies of Education），日本社会教育学会（The Japan Society for the Study of Adult and Community Education），等。

3 フリードリッヒ•ニーチェ「道徳の系譜」『ニーチェ全集11』信太正三訳，ちくま学芸文庫，1993年，360頁；Foucault, M., “Nietzsche, la généalogie, l'histoire”（1971）, *Dits et Ecrits*, tome II, Gallimard, 1994, p.146； ミシェル・フーコー「ニーチェ，系譜学，歴史」伊藤晃訳，『ミシェル・フーコー思考集成X』筑摩書房，2002年，25頁

4 イバン・イリイチ「ホモ・エドゥカンドゥスの歴史」『生きる思想』桜井直文監訳，藤原書店，1991年，参照。

5 Vincent de Beauvais, *De la condition ou enseignement des enfans nobles*, traduction française, BnF français 9683, 1401-1500. フランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）所蔵写本。

6 *ibid*., fol. 71v

7 Arpad Steiner ed., *Vincent of Beauvais: De eruditione filiorum nobilium*, Medieval Academy Books, No. 32, 1938, p.xxx; “At any rate, only one copy of the French translation is in existence, in a fifteenth-century manuscript, B.N. français 9683, which Delisle, without further evidence, declared to be the one made by Jean Daudin.”。ジャン・ドーダンについては，Hamm Frédérique, Jean Daudin, chanoine, traducteur et moraliste, In: *Romania*, tome 116 n° 461-462, 1998。

8 Vincent de Beauvais, Tractatum de eruditione filiorum regalium, in; *Opuscula, Vincentius Bellovacensis*, Basel, 1481; Steiner ed., *op. cit*., p.82。英訳に，*Vincent of Beauvais: The Education of Noble Children*, translated by P. Throop,（MedievalMS），2011。

9 *Senecae varia opera philosophica*, 1275-1301, BnF latin 6390, De moribus, fol.9r; Pseudo-Seneca, *De moribus. Add: Proverbia. De remediis fortuitorum*, 1475-1488; *Ouvrages et extraits des ouvrages*

de Sénèque, Bibliothèque de l'Arsenal Ms-1085, 1301-1400, 284; *Recueil*, Bibliothèque de l'Arsenal Ms-711, 1101-1300, Seneca de moribus, fol. 237r; *Senecae Philosophi Stoicorum omnium acutissimi opera quae extant omnia*, Basileae, 1557, p.747; Otto Friedrich ed., *Publilii Syri Mimi Sententiae*, Berolini, 1880, SS.261・281。なお，disciplinaについては，Henri-Irénée Marrou,《doctrina》et《disciplina》dans la langue des pères de l'Église, *ALMA*（*Archivum Latinitatis Medii Aevi*）, Volume 9, 1934. を参照のこと。マルーは，disciplinaに含まれる服従や鞭打ちの語義が古典ラテン語には見られず，教父神学あるいは聖書のラテン語訳が背景にあること，とりわけ鞭打ちに関しては七十人訳聖書を契機としたπαιδείαとそのラテン語訳disciplinaという受容過程があることを指摘している。

10 BnF français 9683, 161r

11 Steiner ed., *op. cit*., pp. 80, 81, 81, 82, 82, 82, 83, 89, 111, 164, 209

12 Vincent de Beauvais, *Speculum historiale*, Venetiis, 1494

13 Jean de Vignay, *Le Second volume de Vincent, Miroir historial. Nouvellement imprimé à Paris*, Paris, 1495

14 *Trésor de la langue française: dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle (1789-1960)* / publié sous la direction de Paul Imbs, Éditions du Centre national de la recherche scientifique, 1971-1994, Vol. XII,; Vol. VII. なお『ロベール仏語小辞典』には，Pédagogie の初出は1495年，Educationは1527年と記載されている（*Le Petit Robert dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, Robert, 2011, p.1839・823)。だがEducationの初出1527年説はダシー訳『ペレグリノ』(Caviceo, G., *Il peregrino (Dialogue tres elegant intitule le Peregrin traictant de lhonneste et pudique amour concilie par pure et sincere vertu*), traduict du vulgaire italien en langue francoyse par maistre Francoys Dassy, Paris, 1527）を典拠にしており，1495年以後のものである。

15 但し，このPédagogieというフランス語がド・ヴィニェ訳『歴史の鏡』に見出されるという見解は是正さるべきであろう。たしかにド・ヴィニェ訳『歴史の鏡』1495年印刷本第 9 巻第15章に“pedagogue”が見出される(de Vignay, *Le Second volume de Vincent Miroir historial*, fol. 7v)。しかし，それは“pedagogue”であって，“pedagogie”ではない。またそれ以前の写本では“enseignement”となっていたものである。“pedagoge”は既に14世紀ニコラ・オレーム（Nicole Oresme, 1322?-1382）によるアリストテレス『政治学』フランス語訳（Albert Douglas Menut ed., Maistre Nicole Oresme: Le Livre de Politiques d'Aristote, Published from the Text of the Avranches Manuscript 223, *Transactions of the American Philosophical Society*, Vol. 60, No. 6, 1970, pp.1-392）に見られる。“pedagogie”の初出は，ジャン・カルヴァン（Jean Calvin, 1509-1564)『キリスト教綱要（*Institution de la religion chrestienne*)』(1541年）に求められよう。リトレ『フランス語辞典』(Littré, É., *Dictionnaire de la langue française*, Tome 3, Paris, 1873）第 3 巻1027頁にある“pédagogie”の項目も，その語の歴史について，「而して主はペダゴジーを導入された（Pourtant le Seigneur les a entretenuz en ceste pedagogie,)」という用例とともに，Calv. Instit. 341と指示していた。マレー編『歴史的原理に基く新英語辞典』もまた項目“Pedagogy”において，その直接的語源をフランス語“pédagogie”に求め，そこにCalvin 16th c.と記していた（Murray, James A. H. ed., *A New English Dictionary on Historical Principles; founded mainly on the Materials collected by The Philological Society*, vol.7, Oxford: Clarendon Press, 1909, p.604)。なお，カルヴァン『キリスト教綱要』フランス語訳に“éducation”“education”は使われていない。生前最終版でみても，1559年ラテン語版では“educatio”“educare”は10数箇所で見出されるが，例えば第 4 巻第 1 章5. のラテン語“educatione”は1560年フランス語訳で“nourriture”，1561年英語訳で“brynging up”が用いられていると

いうように，“éducation”“education”が充てられることはなかった（Ioanne Calvino, *Institutio christianae religionis in libros quatuor*, Genevae, 1559; Iean Calvin, *Institution de la religion Chrestienne*, Geneve, 1560; *The Institvtion of Christian Religion, wrytten in Latine by maister Ihon Caluin, and translated into Englysh according to the authors last edition, seen and allowed according to the order appointed in the Quenes majesties injunctions*, London, 1561）。このように，カルヴァン『キリスト教綱要』仏英版の特性のひとつは，その“pedagogie”が“éducation”・“education”と無縁のところに成立していたということである。

16 Oscar Bloch et Walther von Wartburg, *Dictionnaire Étymologique de la Langue Française*, Presses Universitaires de France, 11e edition, 1996

17 Gaston Mialaret, *Les sciences de l'éducation*, PUF, 11e edition, 2011, p.4；“Dauzat signale pourtant qu'il est apparu en 1327 dans le *Miroir historial* de Jean de Vignay”；ガストン・ミヤラレ『教育科学』石堂常世訳，白水社（文庫クセジュ），1987年，9頁。中内敏夫『教育学第一歩』（岩波書店，1988年）も，「「教育」ということばそのものは，早くは1327年ころの文献（ジャン・ドゥ・ヴィニェ『歴史の鏡』）にもみられ」（155頁），と踏襲してしまっていた。

18 Albert Dauzat, *Dictionnaire Étymologique de la Langue Française*, Librairie Larousse, Paris, 1938, p.267

19 ジャン・ド・ヴィニェについて，Knowles Christine, Jean de Vignay, un traducteur du XIVe siècle. In: *Romania*, tome 75 n° 299, 1954。

20 “Nourriture et discipline fait bonnes meurs.”; Vincent de Beauvais, *Miroir historial, traduction en français par Jean de Vignay, Livres IX-XVI*, 1300-1400, Bibliothèque de l'Arsenal Ms-5080, fol. 45v; Vincent de Beauvais, *Speculum historiale, traduction française par Jean de Vignay, sous sous le titre Miroir historial,* vol. II. (Livres VII-XI), 1370-1380, NAF 15940, fol. 121r; Vincent de Beauvais, *Miroir Historial [Speculum historiale], traduction en français par Jean de Vignay*, vol. 2, Livres IX-XVI. 1396, BnF français 313, fol. 11v; Vincent de Beauvais, *Miroir historial, traduit en français par Jean du Vignay*, vol.1, Livre I-IX, 1455, BnF français 308, fol. 368r

21 Jean de Vignay, *Le Second volume de Vincent Miroir historial. Nouvellement imprimé à Paris*, Paris, 1495, fol. 41r

22 *Senecae Philosophi Stoicorum omnium acutissimi opera quae extant omnia*, Basileae, 1557, p.747; Otto Friedrich ed., *Publilii Syri Mimi Sententiae*, Berolini, 1880, SS.261・281

23 *Senecae varia opera philosophica*, 1275-1301, BnF latin 6390, fol.9r。また『箴言集（*Prouerbia*）』に“edoctio et disciplina mores facit”（fol.7r）と見える。16世紀初頭のドイツ語訳では，“auftziechung vnd zucht: machent sitten:”（*Hienach volgt ain kurtzer außzuge, den ich Dieterich von Pleningen ... vom Seneca gethan hab: Darjnnen angezaigt, wye man die kinder aufziehen soll*, Landßhut, 1515）。

24 *Les Euvres de Sénèque, translatez de latin en françoys par maistre Laurens de Premierfait*, Paris, 1500-1503, 50r. 擬セネカ『不幸の治療について（*De remediis fortuitorum*）』13.にあるeducare（“educandos”）のフランス語訳も“nurrir”，1547年英語訳でも“noryshed up”（兼利琢也訳『セネカ哲学全集4』岩波書店，2006年，397頁; *Les Euvres de Sénèque, translatez de latin en françoys par maistre Laurens de Premierfait*, Paris, 1500-1503, 26r; *The remedyes agaynst all casuall chaunces, A dialogue betwene Sensualyte and Reason, Lately translated out of Latyn into Englyshe by Robert Whyttynton*, London, 1547; Palmer, R. G., *Seneca's De Remediis Fortuitorum and the Elizabethans*,

Institute of Elizabethan Studies, 1953, p.57)。

25 *Recueil d'anciennes poésies françaises*, 1275–1300, Bibliothèque de l'Arsenal. Ms-3142, 320r. また14世紀写本『羅仏辞典』でも，“Educatio nouriture”（*anonymi Dictionarium Latinogallicum,* 1301–1400, manusctrit BnF latin 7692, fol. 28v).

26 *Maistre Nicole Oresme, Le livre de Ethiques de Aristote*, published from the text of MS. 2902, Bibliothèque royale de Belgique, éd. A. D. Menut, New York, 1940; Albert Douglas Menut, *Maistre Nicole Oresme: Le Livre De Politiques d'Aristote, published from the Text of the Avranches Manuscript 223*, Transactions of the American Philosophical Society, Vol. 60, No. 6, 1970

27 *Ethica Nicomachea Translatio Roberti Grosseteste Lincolniens sive 'Liber Ethicorum'*, edidit Renatus Antonius Gauthier, Aristoteles Latinus XXVI I–3, Leiden, 1972

28 *Aristotelis Stagyritae Ethicorum lib. X. cum Auerr. corduben. exactiss. commentariis. Item & eiusdem Aristo. Politicorum lib. VIII. ac Oeconomicorum lib. II. Leonardo aretino interprete*, 1521

29 *Oresme, Le livre de Ethiques de Aristote*, éd. A. D. Menut, pp.532–534

30『プラトン全集 1』松永雄二訳，岩波書店，1975年，320頁

31 *Platonis Timaeus a Chalcidio Latino sermone translatus. Platonis Phaedo a Henrico Aristippo Latino sermone translatus, sec. XIV*, Manuscript Vat.lat.2063, 106r

32 Plato, *Phaedo*, translated into Latin by Leonardo Bruni, Marston MS 78, ca. 1440–50, 49v; Plato, *Opera*, Leonardus Bruni Aretinus interpres, BnF latin 6568, 1472, 48r

33 Plato, *Opera*, Marsilio Ficino trad. et comment, Venetiis, 1491, 184r。ちなみに，フィチーノ訳でさえ，機械的に検索した限りでプラトン全作品中の名詞“παιδεία”154語，そのほとんどが“disciplina”もしくは“eruditio”と訳されている。“educatio”と訳されているのは7例にすぎない（Bekker, Immanuel ed, *Platonis Dialogi Latine juxta interpretationem Ficini aliorumque, Platonis scripta graece omnia*, Vol. 10 & 11, Londini, 1826)。

34 *Le Phédon de Platon, traittant de l'immortalité de l'âme... traduit du grec en françois... par Loys Le Roy*, Paris, 1553, p.198. なお，ギヨーム・ビュデ，エラスムス，ロレンツォ・ヴァッラら錚々たる人文学者の名を連ねた『希羅辞典』(1530年）の「トロフェー（τροφή)」項目も，「トロフェー（τροφή)とはeducatio・nutrimentum（營養）であり，養い(alimonia)・食料(alimentum)・餌(esca)・食物(victus)・糧食(commeatus)，なおまた飲酒(potus)だ。」と記していた（*Lexicon Graecolatinum,* Parisiis, 1530)。

35 BnF français 9683, 69v, & 102v. ちなみに，Eph vi:4の訳としては，1535年オリヴェタン仏語訳聖書では“nourrissez les par enseignement et correction du Seigneur.”（*La Bible qui est toute la Saincte escripture*, trad. Pierre Robert Olivétan, Neuchâtel, 1535)。カステリオン訳聖書では，ラテン語訳“eos in Domini disciplina ac monitis educate.”（*Biblia interprete Sebastiano Castalione*, Basileae, 1556)，フランス語訳“les nourrisses en la doctrine e remontrances du Seigneur.”(Sebastian Chateillon, *La Bible novvellement translatée*, A Bale, 1555)。また，1384年頃のウィクリフ英語訳聖書では“norischeȝe hem in the discipline and correccioun,”（*The Bible in English: 21 different versions of the English Bible: from the 10th to the 20th Century*, CD-ROM, Chadwyck-Healey, 1996)，1529年ルター独語訳新約聖書では“zihet sie auff in der zucht vnd straff des Herrn.”（*Das gantz New Testament*, Colonia, 1529)。

36 BnF français 9683, 71v

37 Petrarca, Francesco, *De remediis utriusque fortunae*, Beinecke MS 203, 2nd half 15th century

38 *Messire François Petracque des remedes de l'une et l'autre Fortune prospere et adverse*, Paris, 1523

39 Petrarca, *Von der Arzney bayder Glück, des guten und widerwertigen*, Augsburg, 1532, 49r。educareは,“ernert”（ernähren）一つを除き全て“erzogen”――erziehenの過去分詞――と訳されている。英語訳もある。例えば第2巻第63章,「ロムルスとレムスは羊飼いの小屋で育てら（educati）れた。」はフランス語訳で“nourris”，ドイツ語訳で“erzogen”，英語訳で“brought up”（*Phisicke against fortune, aswell prosperous, as aduerse conteyned in two books*, — *Written in Latine by Frauncis Petrarch, a most famous poet, and oratour. And now first Englished by Thomas Twyne*, London, 1579）。

40 寺崎弘昭・周禅鴻『教育の古層』かわさき市民アカデミー出版部，2006年，参照。

41 また，*OED*の編集主幹を務めたマレー（James Augustus Henry Murray 1837-1915）の編に成る『歴史的原理に基く新英語辞典』（Murray, James A. H. ed., *A New English Dictionary on Historical Principles; founded mainly on the Materials collected by The Philological Society*, vol.3, Oxford: Clarendon Press, 1897, E p.44）。

42 *The Boke named The Gouernour deuised by Sir Thomas Elyot, Knight, edited from the first edition of 1531 by Henry Herbert Stephen Croft*, vol.1, London, 1883, p.24

43 John Gough Nochols ed., *Inventories of the wardrobes, plate, chapel stuff, etc. of Henry Fitzroy, Duke of Richmond*, London, 1855, p.xliv; Henry Ellis ed., *Original Letters, illustrative of English History*, Third Series vol. I, London, 1846, p.336。 1533年には動詞educate（“educate and browght upp”）もヘンリー・ダウズ（Henry Dowes, d.1550）の書簡の中に姿を見せている（*ibid*., p.344）。

44 Richard Whitford, *The Rule of saynt Augustyne, bothe in latyn and englysshe, with two exposicyons*, London, 1525

45 また，“education”用例として，ヴィヴェス（Juan Luis Vives, 1492-1540）『キリスト教女子教育論（*De institutione foeminae Christianae*）』（1524年）の1529年英語訳（*A very frutefull and pleasant boke called the Instructio[n] of a Christen woma[n] made fyrst in Laten and dedicated vnto the quenes good grace by the right famous clerke mayster Lewes Uiues; and turned out of Laten into Englysshe by Rycharde Hyrd*., London, 1529; Juan Luis Vives, *The Instruction of Christen Woman*, University of Illinois Press, 2002）。英訳者献辞に3語の“education”が見られるが，ラテン語原典中のeducatio・educareの訳には基本的に“bryngyng up”が用いられているもの（Cf: *Io. Lodouici Viuis Valentini De institutione foeminae Christianae*, Antuerpiae, 1524）。

46 “nourysshed & brought vp. For educacyon & doctryne / yt is to saye / bryngynge vp & lernynge / done make ye maners / with good & vertuous {per}sones (sayth the prophete) you shalbe good & vertuous.”（Richard Whitford, *A Werke for Housholders or for them ye haue the gydynge or gouernaunce of any company*, London, 1530）

47 Richard Whitford, *The Pype, or Tonne, of the Lyfe of Perfection*, London, 1532, fol.xxxix; cited from Brandon Alakas, “Closed and kept most surely in religion”: Piety and Politics in Richard Whitford's The Pype, or Tonne, of the Lyfe of Perfection, *Renaissance and Reformation*, 36.1, Winter 2013, p.103

48 Thomas Elyot, *The Education or bringinge vp of children, translated oute of Plutarche*, London, c.1532; Pepper, R. D., *Four Tudor Books on Education*, Scholars' Facsimiles & Reprints, 1966

49 Plutarchus, *De liberis educandis Traduccion de Guarino de Verona*, Padova, 1471（*De liberis*

educandis. Trad. Guarinus Veronensis.／*De legendis antiquorum libris. Trad. Leonardo Bruni.*, Padova, 1471)；*Liber Plutarchi de liberis educandis, cum prefatione Guarini Veronensis*, BnF latin 16593, 1401-1500。ちなみに，シエナのフランチェスコ・パトリツィ（Franciscus Patricius Senensis, 1413-1494)『国家提要（*De Institutione Reipub.*)』の「子どもの養育・教育における親の義務（De officio parentvm in alendis, educandisque liberis))」なる章にある“liberis educandis”は，フランス語訳『人的ポリスの書（*Le liure de Police Hvmaine*)』では“nourrissement d'enfans”，英語訳『市民政事の道徳的方法（*A Moral Methode of Ciuile Policie*)』では“education or bringing vp of chyldren”となっている（*Francisci Patricii Senensis Pontificis Caietani De Institutione Reipub*. Libri nouem, Prato, 1534, fol. 58v; *Le liure de Police Hvmaine*, Paris, 1549, 69v; A Moral Methode of Ciuile Policie ── *Done out of Latine into Englishe, by Rycharde Robinson*, London, 1576, 43v)。フランチェスコ・パトリツィについては，James Hankins, *Virtue Politics: Soulcraft and Statecraft in Renaissance Italy*, The Belknap Press of Harvard U. P., 2019, Chapter 17. Francesco Patrizi and Humanist Absolutism, pp.386-422，参照。

50 寺崎弘昭「〈教育〉の生成とその構造」山崎準二編『教育原論』学文社，2018年

51 *The philosophie, commonlie called, the morals vvritten by the learned philosopher Plutarch of Chæronea. Translated out of Greeke into English, and conferred with the Latine translations and the French, by Philemon Holland of Coventrie, Doctor in Physicke. VVhereunto are annexed the summaries necessary to be read before every treatise*, London, 1603

52 この「ピボット的旋回」の経過は，擬プルタルコス『子供の教導について』希羅英変遷を抜粋した次の表によっても，明晰判明に理解されよう。

擬プルタルコス『子供の教導について』希羅英変遷（一部抜粋）					
	περὶ παίδων ἀγωγῆς	*De liberis educandis* Traduccion de Guarino de Verona 1471	*Plutarchi Chaeronei, philosophi & historici Gravissimi, Ethica sive Moralia opera,* Basileae, 1554 (Guarino de Verona)	Thomas Elyot, *The Education or bringinge vp of children translated oute of Plutarche,* London, c.1532	Holland, Philemon, *The philosophie, commonlie called, the morals vvritten by the learned philosopher Plutarch of Chæronea,* London, 1603
5A	τρέφω	nutrierunt	nutrierunt	noryshed	noursed
3C	τρέφειν	edducant	alanto	brynge vp	reare
3C	τροφῆς	educatione	alimento	Educacion and bryngynge vp	feeding and nourishing
1A	ἀγωγῆς	educatione	educatione	education or bryngynge vp	education
8E	ἀγωγῆς	educatione	educatione	bryngynge vp	education
8E	ἀγωγῆς	institutionem	institutionem	instructe	education
8F	ἀγωγήν	instructionem	instructionem	instructed	education
13C	εὐαγωγία	bene instituendis	bene instruendis	good bringinge vp	good education
3B	παιδεῖαι	disciplina	disciplina	discipline	discipline and education

5C	παιδεία	eruditio	eruditio	lernynge	education
4C	παιδείας	disciplinam	disciplinam	doctrine	education and training up
6A	παιδείας	eruditione	eruditione	bryngynge vp	traine up

なおヘレニズムからローマ時代にかけて，ἀγωγήは特にスパルタの教育を指す語として用いられた（Lévy, E., *Sparte: histoire politique et sociale jusuqu'à la conquête romaine*, Seuil, 2003, pp.50-51）。リュクルゴス伝をはじめとするプルタルコスによるラケダイモン人の称賛はこの用語法に依っており，近代以降のeducatioの用法の旋回を理解する上で示唆的である。もちろん4世紀ナジアンゾスのグレゴリオス『第2講話』16.，そして590年頃大グレゴリウス『司牧規則(*Pastoralis curae*)』1.1.と重ねて。「人間という多様で変わりやすい動物を導く(ἄγειν, regere vel imbuere)，これこそが術の中の術，学の中の学である(τέχνη τις εἶναι τεχνῶν, καί ἐπιστήμη ἐπιστημῶν, ars artium & disciplina disciplinarum)」(*Sancti Gregorii Nazianzeni, cognomento theologi, Opera. Nunc primum graece & latine conjunctim edita,* Paris, 1609, p.8; Gregorius Nazianzenus, *Hi sunt in hoc codice libelli X,* Apologeticus, Argentoratum, 1508)。「魂の指導は術の中の術(ars est artium regimen animarum;)」(Gregorius Magnus, *Regula pastoralis,* St. Gallen, Stiftsbibliothek, Cod. Sang. 218, fin du IXe siècle)。

53 白水浩信「教育言説揺籃期のéducationなき教育論― ジャック・アミヨとプルタルコス『子どもの教育について』」『思想』岩波書店，2018年2月，31-47頁，参照。また，ギリシア語τροφή～ラテン語educatioの系譜を強調した，白水浩信「教育・福祉・統治性―能力言説から養生へ」(『教育学研究』日本教育学会，第78巻第2号，2008年，50-60頁）を参照

54 Thomas Elyot, *The Dictionary of syr Thomas Eliot knyght*, London, 1538

55 *A fruteful, and pleasaunt worke of the beste state of a publyque weale, and of the newe yle called Vtopia: written in Latine by Syr Thomas More knyght, and translated into Englyshe by Raphe [sic] Robynson*, London, 1551

56 Lupton, J. H. ed., *The Utopia of Sir Thomas More in Latin from the edition of March 1516, and in English from the first edition of Ralph Robynson's Translation in 1551*, Oxford, 1895, p.55; 澤田昭夫訳『改版 ユートピア』中公文庫，1993年，77頁。トマス・モアについては，寺崎弘昭「モア―ユートピアと教育」宮澤康人編『近代の教育思想』放送大学教育振興会，1993年，参照。前1世紀ローマのキケロ（Marcus Tullius Cicero)『善と悪の究極について（*De Finibus Bonorum et Malorum*)』は，「大地が生み出すものたちにも，動物たちのものと似かよった成長（educatio）と成熟が認められる。」(5-39；『キケロー選集10』永田康昭他訳，岩波書店，2000年，293頁）と，「大地が生み出すものたち」＝植物の成長をも《教育（educatio)》だとしていた。

57 Lupton, *op. cit*., p.163; 澤田訳148頁

58 *La Description de l'isle d'vtopie*, Paris, 1550, 49v

59 Lupton, *op. cit*., p.183; 澤田訳162頁

60 *La Description de l'isle d'vtopie*, 57r. クセノフォン『オイコノミコス（家政学)』(v.5）の1532年英語訳では，「大地は野獣を育む（συμπαρατρέφω, bryngeth vppe and nourissheth)」(*Xenophons Treatise of Housholde*, London, 1532)。

61 1570年の英羅辞典でも“Educate, educare”と，動詞“Educate”がラテン語“educare”と等置されることが示されている（Leuins, P., *Manipulus Vocabulorum: A Dictionarie of English and Latine Wordes*,

London, 1570, column 40)。

62 Henry Kiddle and Alexander Jacob Schem eds., *The Cyclopaedia of Education*, 1877, p.249;『教育辞林』木村一歩訳，1882年，第八冊31頁。また，白水浩信「ラテン語文法書におけるeducare の用法説明とその用例―ノニウス・マルケッルス『学説集』及びエウテュケス『動詞論』を中心に」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第126巻，2016年，参照。ドナルドソンのラテン語educo理解を参考までに敷衍し図示すれば次のようになる。

動詞	現在・一人称単数	不定法	現在・三人称単数	動形容詞	名詞
educo	ēdŭco	ēducāre	ēducat	ēducandus	ēducatio
	ēdūco	ēdūcere	ēdūcit	ēdūcendus	ēductio

“eductio”は，クラストヌス『羅希辞典（*Vocabulista latino-graecus*）』（Vicenza, 1483年）にἐξαγωγήの訳を伴って見られるが，ギリシア教父アレクサンドリアのクレメンス（150?-215?）『教導者（パイダゴーゴス）』のGentian Hervetus（1499-1584）によるラテン語訳に見えるもの。「教導（παιδαγωγία, Paeda[go]gia）とは子供たちを導くこと（ἀγωγή, eductio）であり，これはその名辞からして明らかである」（I-12.1; *Clementis Alexandrini Omnia qvae qvidem extant operi, nunc primum e tenebris cruta Latinitateque donata, Gentiano Herueto Aurelio interprete*, Florentiae, 1551, p.11)。educere＝eductioは「導き（ἀγωγήアゴーゲー）」の訳語であり，「教導（παιδαγωγία, Paedagogia）」の核心なのだ。それはeducatio＝educareとは系譜を異にする。ドナルドソンの言は，当時，例えば「ブリテン初の教育学教授」ジョセフ・ペイン（Joseph Payne, 1808-1876）が1871年の講義「教育の理論あるいは科学（*The Theory or Science of Education*）」で教育（education）〉の定義を「引き出す（draw forth）」（＝educere）とすることに固執しそのことによって荒唐無稽の説を開陳して醜態を晒した（*Educational Times and Journal of the College of Preceptors*, vol. XXIV, August 1871, p.95），そういう上滑りに対する諫言として敢えて発せられたものである。にもかかわらずその後も，こうした上滑りは性懲りもなく後を絶たない。一例だけ挙げよう。モーリス・クラフトは，一段落を割いて，なんの典拠・論証もなく“educare”の意味を“to train or to mould”としたうえで，education論を二派に分け，“educare”派に「特定の人間類型の再生産と，教授（instruction）・服従（obedience）・知の獲得を強調する」ホッブズやデュルケーム，“educere”（to lead out）派にルソーやフレーベルを配する珍妙な図式を提示している（Craft, Maurce, Education for Diversity, *Education and Cultural Pluralism*, Falmer Press, 1984, p.9)。このわずか一段落に依拠して“educere”派に与し，社会人類学者インゴルドは持論の“attention”論を膨らまし（Ingold, T., Foreword, *Education in the North*, 20（Special Issue），2013, p.1; Ingold, T., *The Life of Lines*, Routledge, 2015, p.134)，教育哲学者マッシュラインは“E-ducating”を造語して得々とする（Masschelein, Jan, E-ducating the Gaze: the idea of a poor pedagogy, *Ethics and Education*, vol.5, no.1, March 2010)。こんなふうに屋上屋を架す自己増殖は蔓延するのである。

63 *Promptorium Parvulorum: The first English-Latin dictionary c.1440 A. D.*, ed. by A. L. Mayhew, London, 1908, p.309; Albertus Way ed., *Promptorium Parvulorum Sive Clericorum Dictionarius Anglo-Latinus Princeps*, London, 1895, p.358

64 *Catholicon Anglicum: an English-Latin Wordbook dated 1483*, ed. by Sidney J. H. Herrtage, Oxford, 1882

65 Middle English Dictionary; https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary（Website accessed 1 April 2020）

66 うち6件は第1巻第3章「アーサー王の誕生と養育（Of the byrthe of kyng arthur and of his nouryture)」において（Sommer, H. O. ed., *LE MORTE DARTHUR by Syr Thomas Malory: the original edition of William Caxton*, vol. I. London, 1889)。他に“fostred”・“brought vp”も。

67 *Chaucer's 'Boece': Englisht from Boethius's "De Consolatione Philosophiae."*, London, 1886, p.8; 畠中尚志訳『哲学の慰め』岩波文庫，1938年，15頁。 nutrireがnoryshenと英訳されたことはもちろんである。「エレア学派やアカデメイア学派の研究で育てられた。(has ben norysched in studies or scoles of Eleaticis and of academicis in grece.)」(*ibid*., p.7; 同上12頁)。

68 Bartholomaeus Anglicus, *De Proprietatibus Rerum, in the English transnlation by John Trevisa,* Harley MS 614, folio 99r

69 Bartholomaeus Anglicus, *De Proprietatibus rerum,* 1275–1300, Smithonian MS; *Livre des proprietés des choses de Bathélemy l'Anglais, traduit du latin par Jean Corbichon,* 1301–1400, BnF manusctit Français 22531, folio 191r

70 George Ashby, A Prisoner's Reflections, A. D. 1463. (Mary Bateson ed., *George Ashby's Poems. edited from two 15th century MSS.,* London, 1899, p.3)

71 詳しくは，鈴木七美『出産の歴史人類学』新曜社，1997年，63–68頁，参照。また，Monica H. Green, The Sources of Eucharius Rösslin's 'Rosegarden for Pregnant Women and Midwives' (1513), *Medical History*, 2009, 53。

72 Eucharius Rösslin, *De partu hominis, et quae circa ipsum accidunt. Libellus D. Eucharii Rhodionis*, Francofurti. Christianus Egenolphus, 1532, H3r

73 Eucharius Rößlin, *Der Swangern frawen vnd hebammen roszgarten*, Hagenau, 1515

74 “when ye wyll wene them, then not to do it sodenly, but a lyttell and lyttell: and to make for it lyttell pylles of breade and suger to eate and accustome it so, tyll it be able to eate all maner of meate: and this shall suffyce for the education and bryngynge vp of infantes at this tyme:”; Thomas Raynalde, *The Byrth of Mankynde: otherwyse named the womans booke*, London, 1545, fol.115v

75 *ibid*., fol.111v

76 Eucharius Rösslin, *Des Divers travaulx et enfantemens des femmes, composé premièrement en latin par... maistre Euchaire Rodion, et depuis tourné en langue françoyse*, Paris, 1536, 64v

77「教育と陶冶（educatione et disciplina, nourriture & discipline)」(第3巻30，Cicero, *Les trois livres de Loix, traduictz de Latin en Francoys par Iehan Collin*, Paris, 1541, p.66;『キケロー選集8』岩波書店，岡道雄訳，1999年，291頁)。ジャン・コランは擬プルタルコス『子供の教導について』の仏語訳者でもある。

78 William Painter, *The Palace of Pleasure beautified, adorned and well furnished, with pleasaunt histories and excellent nouelles*, London, 1566, p.46; William Painter, *The Palace of Pleasure: Elizabethan versions*, edited by Joseph Jacobs, vol. I., London, 1890, p.91

79 Aulus Gellius, *Noctes Atticae*, Venedig, 1496, fol. LXVII

80『ルキアノス全集3 食客』丹下和彦訳，京都大学学術出版会，2014年

81 Marsh, David, Guarino of Verona's Translation of Lucian's Parasite, *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, Tome 56, no.2, 1994

82 プラトンの宇宙生命生成論たる『ティマイオス』の中では，ギリシア語《τροφή（トロフェー)》は「養分」

とも訳され，4世紀カルキディウス（Calcidius）および15世紀フィチーノ（Marsilio Ficino）によるラテン語訳と共に示せば，「養分（nutricatio, nutritio）の流れ」（44b）は宇宙と人間の生成作用を担っている（種山恭子訳「ティマイオス」『プラトン全集 12』岩波書店，1975年，172–173頁；Maggie, J., ed., *On Plato's Timaeus: Calcidius*, Harvard University Press, 2016, p.88；Bekker, Immanuel ed, *Platonis Dialogi Latine juxta interpretationem Ficini aliorumque, Platonis scripta graece omnia*, Vol. 11, Londini, 1826, p.250）。そしてτροφήは，ラテン語でnutrimentum，英語でnorysshementとも訳され続ける（例えばプルタルコス『健康のしるべ（*De tuenda bona ualetudine praecepta*）』，*Opuscula Plutarchi nuper traducta Erasmo Roterodamo interprete*, Basileae: Froben, 1514；*The Gouernaunce of Good Helthe 1530,* De Capo Press, 1968）。

83 eruditione 論たる『貴族の子らの教養』は，第1章「貴族の子らの教養（De puerorum nobilium eruditione）」で，魂が「肉（caro）」に宿った故に宿命づけられた人間の二つの「粗野性（ruditas）」（無知ignorancia と欲望concupisciencia・cupiditas）に対するに“eruditio”が必要であることを説き，その“eruditio”は言葉（verbum）の“doctrina”と習慣（mores 性格・道徳）の“disciplina”とから成ることを定式化している。この定式化は，アリストテレス『ニコマコス倫理学』第2巻を暗黙の下敷きにしているもの。アリストテレスは，徳（ἀρετήアレテー）を知性（διάνοιαディアノイア）の徳とエートス（ἦθος）の徳とに区分し，前者は学習（διδασκαλίαディダスカリア）から，後者は習慣（ἔθοςエトス）から生まれると言い（1103a10），後者には，さらに（1104b10），「パイデイア（παιδεία）」の必要性を重ねる。13世紀グロッセテステによる『ニコマコス倫理学』訳――ヴァンサンと同時期のラテン語訳――では，「学習（διδασκαλία）」は“doctrina”，「パイデイア（παιδεία）」は“disciplina”と訳され（動詞παιδεύωは“disciplinari”あるいは“erudire”）ており，“eruditio”を“doctrina”と“disciplina”とから成るものとするヴァンサンの定式化（“eruditio”＝“doctrina”＋“disciplina”）は，このアリストテレス受容の流れを下敷きにして，「肉」による人間自然の堕落（「粗野性」）なるキリスト教的前提の下に立論されたものである。ヴァンサン・ド・ボーヴェの教養論については更に，Rebecca J. Jacobs-Pollez, The Role of the Mother in Vincent of Beauvais' *De eruditione filiorum nobilium, Journal of the Western Society for French History*, volume 38, 2010；Rebecca J. Jacobs-Pollez, *The Education of Noble Girls in Medieval France: Vincent of Beauvais and De Eruditione Filiorum Nobilium*, PhD Dissertation at the University of Missouri-Columbia, 2012，をも参照。女性教養論についてはまた，遡って，1世紀ムソニウス・ルフスを比較参照すべきであろう（Cora E. Lutz, Musonius Rufus “The Roman Socrates”, *Yale Classical Studies*, vol.10, Yale UP, 1947，特にpp.38–49）。そこでルフスは，女性は男性と同等の感覚を有しており男性同様哲学を学び「教養（παιδεία）」に与るべきこと，を力説していた。

84 *Meno, interprete Henrico Aristippo, edidit* Victor Kordeuter, Plato Latinus Vol. I, London, 1940

85 Franciscus Svsemihl ed., *Aristotelis Politicorvm Libri Octo cvm vetvsta translatione Gvilelmi de Moerbeka*, Lipsiae, 1872

86 Steiner ed., *op. cit*., p.5。「ベン・シラの知恵」『聖書外典偽典2 旧約外典II』村岡崇光訳，教文館，1977年，100頁。『シラ書』（Ecclesiastics 7:25）の動員は，ジャック・ルグラン（Jacques Legrand, 1365?–1415?）の道徳書『善き習俗の書（*Le livre de bonnes moeurs*）』第4巻第9章にも見られるもので，“erudi”を“enseigner”と訳している（Jacques Legrand, *Le livre de bonnes moeurs*, Paris, 1487）。英語訳では“teche”（*Here begynneth the table of a book entytled the book of good maners*. Westminster: William Caxton, 1487, book 4 cap.xi）。ルグラン『善き習俗の書』にも，フランス語最初の百科事典と言われる13世紀ブルネット・ラティーニ『宝典（*Li livres dou Tresor*）』にもeducationは見出されない

(Brunetto Latini, *Li livres dou tresor: publié pour la première fois d'après les MSS. de la Bibliothèque impériale, de la Bibliothèque de l'Arsenal et plusieurs MSS des départements et de l'étranger*, Paris, 1863)。

87 Steiner ed., *op. cit*., p. 80

88 *Catonis Disticha Moralia, cum scholijs Eras. Rot. eadem Disticha Graece*, Basileae: Froben, 1526。1566年ミリオ訳では“τὰ τέκνα παίδευε.”(*Catonis Disticha moralia, graece reddita in gratiam studiosae juventutis, interprete Joanne Mylio*, 1566)。

89 *Contenta In Hoc opere sunt hæc. Catonis praecepta moralia recognita atque interpretata ab Erasmo Roterodamo*, Argentorati, 1515

90 *Le Cathon en françoys*, BnF RES-R-430, 1477

91 *Here begynneth the prologue or prohemye of the book callid Caton whiche booke hath ben translated in to Englysshe by Mayster Benet Burgh*, Westminster: printed by William Caxton, 1484。なおドイツ語訳では,“leren die kindt alle tag”(*Catho in Latin und Teutsch*, Basel, 1495-1500?),『阿呆船(*Das Narrenschiff*)』(1494年)の著者セバスティアン・ブラントによる訳では“Ein Kind soltu zum gütem ziehen”(*Catho in Latin, durch Sebastianum Brant getütschet*, Basel, 1498)となる。

92 *Preceptes of Cato: wyth annotacions of D. Erasmus of Roerodame, very profitable for all men: newly imprinted and translated* [Robert Burrant], London, 1550

93 チェーザレ・リーパ(Cesare Ripa, c.1560-c.1622)『イコノロギア(*Iconologia*)』(1625年)は,EDVCATIONEを「笞と懲治(la verga, & la correttione)」で彩ったもの。それを正当化するのが,旧約聖書『箴言』(Proverbs 29:15)「笞と懲治は知を授ける(Virga atque correctio tribuit sapientiam,)」,そして「セネカ『怒りについて』第3巻,教育と規律は品性(習俗・習慣・道徳性)を制作する。(Seneca de ira lib.3. Educatio, & disciplina mores faciunt,)」(Cesare Ripa, *Della novissima iconologia*, Padova, 1625, pp.192-193)。しかし,典拠を「セネカ『怒りについて』第3巻」としているのは,歴史的忘却を示すもの。“Educatio, & disciplina mores faciunt”は偽セネカ『道徳格言集(*De moribus*)』の一文。『イコノロギア』のEDVCATIONEは偽セネカ『道徳格言集』を触媒として精錬析出された17世紀education標本の一つにすぎない。1670年ドイツ語訳でもEDVCATIONEは“Aufferziehung”と訳され,同様に,『箴言』「笞と罰は知を与える(Ruhte[Rute] und Straff gibt Weissheit.)」,「セネカ『怒りについて』第3巻(Seneca im 3. Buch vom Zorn)」「教育と規律は人倫的人民を制作する。(Aufferziehung und Disciplin machen sittsamme Leute.)」を動員して正当化されている(*Herrn Caesaris Ripae von Perusien, Ritters von St. Mauritio und Lazaro, etc. erneuerte Iconologia oder Bilder-Sprach*, Franckfurt, 1670, SS.162-163)。歴史的地滑りは典拠さえも地層の堆積の中に埋め隠す。それを真に受けるわけにはいかない。

94 エラスムスは1516年ラテン語訳新約聖書でも,「薫陶と訓戒とによって彼らを育てよ。(ἐκτρέφετε αὐτὰ ἐν παιδείᾳ καὶ νουθεσίᾳ)」(Eph vi.4)を“educetis eos in eruditione, & correptione domini.”と訳している(*Novum Instrumentum omne, diligenter ab Erasmo Roterodamo recognitum & emendatum*, Basileae, 1516)。ここでeducetisはeducareの接続法。παιδεία=eruditione。

95 Henri-Irénée Marrou, *Saint Augustin et la fin de la culture antique*, Éditions E. de Boccard, 1958, p.555; H.-I. マルー『アウグスティヌスと古代教養の終焉』岩村清太訳,知泉書館,2008年,438頁。但し,岩村訳で「disciplinaはeducatioの意味に用いられ」(438頁)とあるのは,誤訳。これではラテン語disciplinaはラテン語educatioの意味に用いられた,という到底マルーが主張するはずもない一文となって

しまっている。

96 Marrou, *Saint Augustin et la fin de la culture antique*, p.553; 前掲マルー『アウグスティヌスと古代教養の終焉』436-437頁。9世紀写本『羅希辞典』では“Educatio ἀνατροφή（アナトロフェー）”, “Disciplina ἀγωγή”, “Eruditio παιδεία”（*Vocabularium Latino-Graecum,* 801-900, manuscrit BnF Latin 7651, folio 57v・49r・61v）。

97 寺崎弘昭・白水浩信「西欧近代と日本の教育―岩波講座『現代教育学』第4巻を中心に」堀尾輝久他編『教育の思想―戦後教育学の再検討』東京大学出版会（近刊予定）参照。Foucault, M., *L'ordre du Discours*, Gallimard, 1971, pp.71-72; フーコー『言説の領界』慎改康之訳，河出文庫，2014年，90-91頁; Foucault, M., *L'Archéologie du Savoir*, Gallimard, 1969, pp.164-169; フーコー『知の考古学』慎改康之訳，河出文庫，2012年; Roger-Pol Droit, *Michel Foucault, entretiens*, Odile Jacob, 2004, pp.92・105; フーコー『わたしは花火師です』中山元訳，ちくま学芸文庫，2008年，9・21頁

98 Walter Benjamin, *Werke und Nachlaß Kritische Gesamtausgabe Band 19: Über den Begriff der Geschichte*, Herausgegeben von Gérard Raulet, Suhrkamp, 2010. SS. 36・34; ヴァルター・ベンヤミン『歴史の概念について』鹿島徹訳，未来社，2015年，54・52頁

The First Use of French word Education: in the manuscript BnF français 9683

SHIROZU Hironobu, TERASAKI Hiroaki

Key Words

education, Genealogy of vocabulary, incunabula, Vincent de Beauvais, Jean Daudin, Pseudo-Seneca

Abstract

In this paper, we show that we can find the first use of the word "education" in the chapters 23 and 40 of the manuscipt dated 1401–1500 (BnF français 9683, 71v and 161r), which was a French translation of Vincent de Beauvais (d.1264)'s *De Eruditione Filiorum Nobilium* by Jean Daudin (d.1382). It is named *De la condition ou enseignement des enfans nobles.*

As for the first use of éducation, French translation of Vincent de Beauvais' *Speculum historiale* (*Miroir historial*) by Jean de Vignay (1283?–1340?) has been referred to by modern dictionaries. For example, *Dictionnaire Étymologique de la Langue Française* (Oscar Bloch and Walther von Wartburg eds.) reads: "éducation 1495", and *Trésor de la Langue Française* follows it: "Éducation 1495 J. de Vignay d'apr. BL. -W.[1-5]". Certainly, we can find the sentence "Educatiõ et discipline fait les meurs" in *Miroir historial* printed in 1495 (*Le Second volume de Vincent Miroir historial*, Paris, 1495, translated by Jean de Vignay, 41r). "Educatiõ" (Education) was correspondent to the Latin word "Educatio" in Pseudo-Seneca's *De moribus*: "Educatio et disciplina mores facit" .

However, we cannot find "education" in precedent manuscripts in the 14th and 15th centuries, which did translate "educatio" into "Nourriture" (*Miroir historial, traduction en français par Jean de Vignay, Livres IX-XVI*, 1300–1400, Bibliothèque de l'Arsenal Ms-5080, fol. 45v; vol. II. (Livres VII–XI), 1370–1380, NAF 15940, fol. 121r; vol. 2, Livres IX–XVI. 1396, BnF, fr.313, fol. 11v; vol.1, Livre I–IX, 1455, BnF, fr.308, fol. 368r). Accordingly, it should be uncertain to be able to assert that we can find the first use of education in the 14th century manuscript, though *Dictionnaire Étymologique de la Langue Française* (Albert Dauzat ed., Librairie Larousse, Paris, 1938) declared "1327, Mir. hist.", and though Gaston Mialaret asserts "Dauzat signale pourtant qu'il [le mot «éducation»] est apparu en 1327 dans le Miroir historial de Jean de Vignay" (*Les sciences de l'éducation*, PUF, 11e édition, 2011).

On the other hand, as for our French translation (BnF français 9683) dated 1401–1500 of *De Eruditione Filiorum Nobilium*, we can even suppose that the first use of education dates back to the 14th century, before 1495 at the latest, because the translator Jean Daudin was active in the 14th century and "only one copy of the French translation is in existence, in a fifteenth-century manuscript, B. N. français 9683" (Arpad Steiner ed., *Vincent of Beauvais: De eruditione filiorum nobilium*, Medieval Academy Books, No. 32, 1938).

In the chapter 23 of BnF français 9683, French translation reads: "Seneque ou liure des meurs Education ou nourriture est discipline Cest a dire education disciplinee fait ses meurs" (71v). This was a translation of the Latin sentence "Seneca in libro de moribus Educatio inquit et disciplina id est educatio disciplinata mores facit" which was correspondent to the sentence "Educatio et disciplina

mores facit" in pseudo-Seneca's *De moribus*. This use of "education" was very a rare case in the 14th and 15th centuries, for the standard translation word of the Latin *educatio* was "nourriture"; "nourriture" in Laurent de Premierfait (d.1418)'s translation (*Les Euvres de Sénèque, translatez de latin en françoys par maistre Laurens de Premierfait*, Paris, 1500-1503, 50r) and "norreture" in *Ce sont des prouerbes seneke le philosophe* (*Recueil d'anciennes poésies françaises*, 1275-1300, Bibliothèque de l'Arsenal. Ms-3142, 320r).

This emergence of "education" in BnF français 9683 was the first faint signal which announced a grand historical landslide of vocabulary motherboard. The Latin *educatio* was one of equivalent terms of the Greek word "τροφή" (trophē). But in the 15th century, the Greek word "ἀγωγή" (agōgē) also came to be translated into Latin "educatio" gradually, together with "τροφή". And then in the 16th and the early 17th century, "ἀγωγή" occupied the word "educatio"-"education", with "παιδεία" (paideia). This pivotal turn of the significance of "educatio" around the pivot point of "ἀγωγή", which we can find out in a series of translations of pseudo-Plutarch's *Περὶ παίδων ἀγωγῆς* (Guarino da Verona—Thomas Elyot—Philemon Holland) symbolically, allowed the "ἀγωγή" (eductio, institutio) and "παιδεία" (disciplina, eruditio) to call themselves "education" and pretend to be a representative concept covering over the discourse field of so-called educational phenomena.